

ハリー・クラーク『アンデルセン童話』の挿絵の特異性 —ステンドグラスとの関係から

大城茉莉恵 (成城大学)

19世紀末から20世紀初頭にかけて挿絵本の黄金時代を迎えたイギリスでは、多くの挿絵画家が活躍した。アイルランドのハリー・クラーク (Harry Clarke, 1889-1931) もその一人である。クラークはオーブリー・ビアズリー (Aubrey Beardsley, 1872-1898) の追随者と見なされているが、ビアズリーはもちろん、他の挿絵画家とも明らかに異なる特徴を持っている。通常挿絵は物語の一場面を再現的に扱うが、クラークの挿絵は現実的空間や登場人物の行動を描かず、物語の場面を具体的に示さない。例として、人物の多くが静止した正面観で描かれる、強い色彩の配置と余白を埋め尽くす装飾による平面的な画面構成が採られる、楕円形の枠が用いられる、現実的空間とは無関係にモチーフが並べられるといった点が挙げられる。

これらの特徴は中世の宗教画、特に礼拝像にしばしば見られるものである。実はクラークは、挿絵に先駆けステンドグラスを制作していた。クラークの挿絵にステンドグラスの影響があることは先行研究で指摘されているが、詳細な分析は見られない。本研究ではクラークの最初の公的出版となった『アンデルセン童話』(1916年)の挿絵と、同じく最初の公的注文作のヨークのホーナン礼拝堂のステンドグラス(1915-1917年)とを比較することで、ステンドグラスがクラークの挿絵のあり方に大きな意味をもっていたことを明らかにする。

近代のステンドグラスは絵画をガラスに描くようなものになっていたが、19世紀後半より中世の色ガラスを鉛の枠でつなぐ技法が復興し、空間や人物の再現性からの逸脱が認められるようになる。クラーク自身、シャルトルを中心にゴシックのステンドグラスを研究し、正面観の人物、画面枠としてのメダイヨン、幾何学的な色彩の配置などを採用している。クラークはステンドグラスで用いた手法を挿絵に応用することで、物語の一場面を再現するのではなく、物語全般に関わるテーマを象徴させようとした。それは短い話を多く収録する『アンデルセン童話』において、一話に対して一挿絵で対処するための工夫であったともいえよう。

挿絵画家の解釈による挿絵の物語からの逸脱は、ビアズリーの『サロメ』(1894年)にも認められるが、クラークはそれをステンドグラスの制作という経験から行った。

以上の観点から、『アンデルセン童話』は挿絵画家としての出発点にあつてステンドグラスの手法を応用し、個人様式を確立した作品と位置づけられるだろう。美術史において挿絵はファイン・アーツとは見なされず副次的に扱われているが、美術の規範から外れるからこそ造形領域を超える新たな試みが容易であった。挿絵は当時の新しい技術や美術運動と関わり社会と美術の動向を映し出す。挿絵を見ることで美術を取り巻く状況が垣間見え、新たな知見が得られるのではないだろうか。